

今月はトピックスとして、①地域医療崩壊阻止のための沖縄県民集会、②地域医療崩壊阻止のための総決起大会、③第187回県医師会臨時代議員会—平成19年度会務報告・諸決算を承認—、④第17回沖縄県医師会県民公開講座（ゆらぐ健康長寿おきなわ、心停止と救命蘇生～あなたの大切な人を助けるのはあなた～）の4題を取り上げている。

地域医療崩壊阻止のための総決起大会（7月24日 笹川記念会館）、地域医療崩壊阻止のための沖縄県民集会（8月1日 ロワジュールホテル）が開催された。医療崩壊は地方だけでなく、都会でも起こっている。小児科、産科、麻酔科を中心に一つの科の廃止から閉院になることもある。最大の原因は①医師不足（5～10万人）②継続される医療費の削減③マスコミや国民の医療関係者のパッシングなどである。命を削って必死に医療を支えている医師・看護師等の医療関係者には批判ではなく感謝の力が大きな力になるだろう。英国、米国のような医療崩壊にならないよう、医療再生を医師会として模索しなければならない。

第187回沖縄県医師会臨時代議員会で新議長に新垣善一先生、副議長に高里良孝先生が選出されました。その後、宮城信雄会長から挨拶の中で「後期高齢者医療制度」、「県立病院改革基本構想と医療提供体制」、「医師確保に直結する後期研修システムの構築」、「救急医療体制」、「医師会会館の竣工と今後の活用」について述べられた。また、地区医師会から寄せられた質問で来年5月に始まる「裁判員制度」、「学校医と学校産業医」、「後期高齢者医療制度」についての活発な討議が行われた。医師会のオピニオンリーダーである代議員の先生方へのエールをお願いしたい。

第17回沖縄県医師会県民公開講座は、ゆらぐ健康長寿おきなわ、心停止と救命蘇生～あなたの大切な人を助けるのはあなた～というテーマで開催され、450名の方が熱心に講演、パネルディスカッション、AEDの実体験コーナーに参加された。琉大法文学部の石崎博志先生のAEDを使った救命体験は多くの参加者に突然死は身近なことで、AEDで確実に救命できるとの思いを強くさせたようでいい講演であった。比較的若い年齢層の参加者が多く、AEDのデモ機を使用している実体験コーナーはクーラーも効かないほど参加者の熱気があったとのこと、市民の関心が高く今後も継続し開催する必要があると思われる。

生涯教育コーナーでは、嶺井定一先生と藤川栄

吉先生から寄せられた激励文は嬉しい便りである。さて、9月号では妊娠は成立するが流産や早産を繰り返して生児が得られない不育症について琉大生殖医学分野の正本仁講師が執筆された。「母体一胎児」間の生命誕生の際の子宮内での複雑—不思議なメカニズムにただ感嘆するばかりである！

金城忠雄先生、砂川富正先生の感染症・予防接種について：日本は麻疹感染症予防対策の後進国で1998年～2001年に沖縄で9名の麻疹による死亡や、2007年に全国の大学を中心に流行したことは記憶に新しい。はしか0（麻疹排除）を達成するには予防接種率95%以上が必要で、県内全会員が一致団結し、1期・2期麻疹予防接種を徹底しなければならない。

久保田徹先生の慢性咳嗽のプライマリケアでは日常診療でしばしば遭遇する疾患であり、診断・治療に大いに役立つ記事である。

琉大医学部附属病院長の須加原一博先生へのインタビューでは、沖縄の課題である専門研修を、「大学病院連携型高度医療人養成推進事業」プロジェクトへ参加し全国の医療機関・大学病院と積極的に連携することによって解決できるのではないかと期待したい。

井上徹英先生の「医療用ヘリ導入への悪戦苦闘」は離島を多数抱える沖縄で先進的にドクターヘリを導入し、それが認められ沖縄の救急ヘリ事業となった経緯である。沖縄の救急医療のための新たな展開に、関係機関の連携・協力をお願いします。

那覇市立病院の地方独立行政法人化の顛末記は、猫の眼行政の中で必死に生き残る道を模索しその結果独立行政法人化を選択した那覇市立病院のその道程と、新しく開かれつつある希望の持てる、医療再生への未来が見えてくるようである。独立行政法人という道を選択した開拓者達の健闘に今後も注目したい。

若手コーナーは「一生勉強」、「自ら実践」をモットーに開業2年目を邁進中の宮里昌先生の力強い開業レポートであった。

編集後記は初挑戦で、沖縄県医師会報を隅々まで読んだのは初めてだった。内容の豊富さには感嘆するばかりである。編集後記からもれた記事もあり、オリンピックの感動の勢いで精読をお勧めします。

広報委員 石川 清和